

令和3年(2021年)8月24日

令和3年度・夏休みあけの全校集会

## 「学ぶとはわからないことが増えること」

長野県蘇南高等学校長 小川幸司

### 1 異常気象を考える「人新世」という視点

この夏は、季節外れの秋雨前線(停滞前線)が日本列島上空に現れ、木曾・中津川地域を大きな災害が襲いました。皆さんの中には一時的に避難生活を送った人もいます。JRの中央西線は8か所で土砂崩落があり、いまだに不通のままです。バスの代行輸送によって不自由な通学をしている皆さんは、JR東海も懸命の復旧工事を進めていますから、いましばらく我慢してください。

今の私たちの置かれている世界の状況が、異常気象によるものであることは明らかでしょう。「いまだ経験したことのない雨になる」といった天気予報がしばしば叫ばれています。人類が文明社会を発展させるなかで、二酸化炭素を膨大に排出して地球の温暖化が進んだ結果、世界各地を異常気象が襲っているわけです。

46億年前に地球が誕生してからの大きな歴史について、科学者たちは、地球環境とそこで生きる生命体の変化を基準にして「地質時代」という区切りをたててきました。先カンブリア代、古生代、中生代と移り変わり、約6600万年前から哺乳類が地上に繁栄する新生代となります。その新生代の中がまた細かく区切られ、現在は、氷河期が終了した時点、約11700万年前から始まる「第4紀・完新世」とであると定義されてきました。

しかし、こうした科学の常識に対し、2000年にオランダの大気化学者クルッツェンが、ワットが蒸気機関を改良した1784年以降について、人間が地球環境に決定的な影響を与えるようになったという意味で「人新世(Anthropocene)」という概念を新設すべきであると主張し、大きな議論を巻き起こした。従来は地球環境が生命体に大きな影響を与えてきたのですが、「人新世」になると人類のほうが地球環境に大きなダメージを与えるようになり、それによって人類を含めた生命体全般が危機的な状況に追い込まれつつあるというわけです。

### 2 人類の目標を「ドーナツ」のイメージで想像する

この夏の異常気象は「人新世」という時代であるがゆえの災害だと考えられるでしょう。

だとすれば、私たちは、災害復旧を願うだけでなく、「人新世」の根本的な問題を解決するような社会をどうつくるのかを考えるべきです。

たとえば、イギリスの経済学者ケイト・ラワースは、人類の目標を「右肩上がりの曲線」として考えることはもうやめるべきだと言います。それにかかわって人類の目標は、「ドーナツ」のようなイメージだろうと提案されます。内側の輪が「人間の幸せの社会的な土台(それ以下には誰も落ちてはならない線)」、外側の輪が「環境的な上限(それ以上に地球に負荷をかけてはならない線)」であり、その間の円環が「人類にとって安全で公正な範囲」になると、彼女は言うのです。私はとても説得力のある理論だと見て

います。

ただ大きな問題があって、ドーナツの外側の輪、これ以上地球に負荷をかけてはならない線をどう人類が守っていくのかということは、とても難しい。そのためには、人類が「いのち」を守るために自分たちの「自由」を抑制しなければならないからです。でも考えてみると、現在の新型コロナウイルス感染症で私たちが直面している課題もまた、「いのち」を守るために自分たちの「自由」を抑制することができるかということが大きな課題になっています。だから、コロナの問題と「人新世」の危機とは、実はつながっているとと言えます。コロナを乗り越えられるかどうかは、気候変動を乗り越えられるかどうかの「前哨戦」なのです。

蘇南高校のひとりひとりが、互いの「いのち」を守るために、自分の「自由」を「何をやってもいい自由」ではなく、「人々の幸せをつくる自由」として行使していくことが、大切なのだと思うのです。

### 3 学ぶことを新たなイメージと概念で想像する

このように新しいイメージ（ドーナツ型の目標）とか概念（人新世）といったものをもつことで、私たちは「どう生きるべきか」が見えてきます。

では、私たちの授業などでの「学び」を新しいイメージと概念で見つめ直してみましよう。

文部科学省は日本の高校の学びを、「何を学んだか（内容重視）」ではなくて「学んだことでどんな能力を身につけたか（成長重視）」に転換することを呼びかけています。そして能力を、「知識」と「思考力・判断力・表現力」と「学びに向かう主体性」にわけてイメージするようにしています。私は、とても大切な高校改革だと考えています。これまでの「何を学んだか」重視だと、テストの「知識」問題と「思考力」問題の合計得点を高い順に並べて成績をつけることになります。でもテストのときにたまたま体調が悪くなって力を発揮できなかった人は、とても可哀そうです。それに対して「どんな能力を身につけたか」重視だと、ふだんの授業で頑張ったこと、努力したことを評価の対象に組み入れることになります。テストがすべてということではなくなります。

本校は、2学期制なので9月末の定期考査のあと、「前期」の成績を出しますが、その成績というのは、「知識点（定期考査や小テストなど）＋思考力点（定期考査や課題など）＋主体性点（課題の取組・ルーブリックなど）」の合計点によってつけていきます。どのように成績がつくのかということは、教科担任の先生から皆さんに説明をするようにします。三つの柱で自分の成績がついていくというイメージをもってほしいと思います。

そしてここが大切なことなのですが、三つの柱の「身についた力」について、自分で振りかえられるようにしてほしいのです。その際に、私たちが皆さんと一緒に目指したい力について、知識・思考力・主体性よりも、もっと未来に役立つような概念をもちたいのです。

蘇南高校の学びをわかりやすくまとめた「グランドデザイン」を、今年度全面的に改訂しました。そのなかの「生徒育成方針」（卒業までに身につけたい力）を、次のような新しいイメージ・概念で表現しています。

☆蘇南高校・生徒育成方針

- A 知識   👉「人間と世界についての豊かな知識・技能」
- B 思考力   👉「自ら問いを立てて探究する力」
  - ①知識を使って思考する力
  - ②複雑な事柄であっても最適解を探す力（判断力）
  - ③他者に自分の考えを伝え、応答を受け止める力
- C 主体性   👉「未来の自分を想像する力」
  - ①学びに真摯に取り組み自己調整する力
  - ②試行錯誤をおそれない力（回復力・レジリエンス）
  - ③学んだ事が未来につながることを想像する力（自己効力感）

蘇南高校は、テストだけで学習の評価を定めませんし、ひとりひとりの大切な魅力・力を多面的に見つめていきたいと考えています。

今回のコロナ第5波は、かつてない感染爆発になっています。そこで本校では、本日を半日授業として、明日から三日間、オンライン授業とすることにしました。理由は二点あります。

- ①夏休み中の人の交流の活発化で、誰もが感染している可能性のある状況にあり、ここで一週間ほど、接触機会を減らしてみる必要があります。中途半端に分散登校をするよりも、まずは接触機会を減らしたほうがいいと言えます。ここで何もなければ、来週から通常日課に戻すことができます。
- ②もし日本の感染状況がさらに悪化すれば、全国の知事から要望が出ているロックダウンの可能性もあります。そのときにオンライン授業で対応できるよう、ここで試しておく必要があります。最悪の事態の時でも、自分たちの高校は続いていくことができることを確認したいのです。

今回のオンライン学習は、自宅でスマホを見ながら学習を進めるので、いつもとは違った苦労があるはずですが、特に「学びに真摯に取り組み自己調整する力」と「試行錯誤をおそれない力」、そして「学んだ事が未来につながることを想像する力」を伸ばせるかどうかのチャレンジだと思ってください。皆さんの学習の取組は、しっかり評価していきます。

ここで信州大学の教育学の研究者、荒井英治郎先生が長野県の高校生約5000人にアンケート調査を行った研究結果を皆さんに紹介します。荒井先生は、高校生が学ぶことをどれくらい大切に考えているかを分析したのです。そのなかに「学校で学習することを面白いとか興味がある」と思っているかどうかという調査項目があります。長野県全体の傾向では、高校1年、2年、3年とあがるにつれて、面白いとか興味があるという人は減っていきます。ところが蘇南高校の皆さんの場合、学年があがるにつれて興味価値もアップしていつているのです。これは「自己効力感」を皆さんが感じているからだと思うのです。とても大切なことです。

#### 4 「学ぶ」ことの二つの哲学的イメージ

最後に「学ぶ」ということに全く違ったイメージを与えた二人の哲学者を紹介しま

す。

二人とも17世紀に活躍した哲学者です。一人はイギリスのフランシス・ベーコンで、彼は「知は力なり」という有名な言葉を残しました。学んで賢くなることで、私たちはパワーアップできるというわけです。これが一般的な学ぶことのイメージでしょう。

それに対してもう一人の哲学者、フランスのブлез・パスカルは、「人間は考える葦である」と言いました。人間が頼りない「葦」だということです。その背景には、学ぶということは、「わからないこと」が増えていくということだというパスカルの見方があります。学ばなければ、わからないということ自体を知りません。学んでいくと、わからないことが見えてきて、それゆえ一層学ぶのですが、一つの疑問が解決すると、今度は別のわからないことが見えてきます。こうして人は学べば学ぶほど、自分たちの「弱さ」を謙虚に自覚していくことになります。

「考える葦」とは、自分の「弱さ（無知）」を自覚して、永遠に「わからない」ことに挑み続ける人間のことです。しかも葦は一本だけではなく、たくさんの葦が群生しているように、人間は仲間と対話をしながら学び続けるのです。

たとえば、

「人新世」の諸問題の解決方法が「わからない」からこそ、対話をしながら学び続けるのです。

皆さんの蘇南高校の学びが、わからないことを増やしていき、わからないことに挑戦し続けるような学びになることを、心から応援しています。